コラム
歴史に学ぶ

鉄炮は種子島から全国へ拡散したことの証　その①
～～天草鉄炮（筒）のおこり～～

西之表市立図書館長　鮫嶋　安豊

今回、「種子島鉄炮鍛冶家系図」の集大成を図ることができた。その系譜を俯瞰（ふかん）して、その鍛冶技術の全国への伝播を探ってみた。

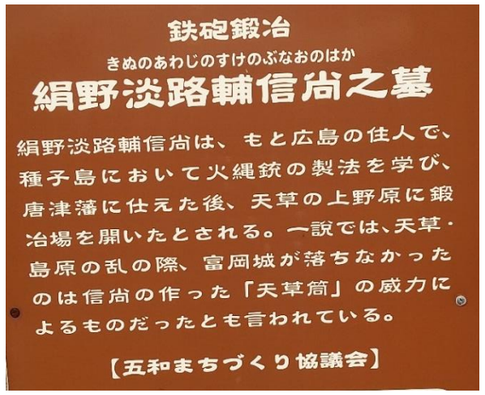
1　天草鉄炮

11 月初旬、「天草鉄炮」を所蔵・展示する「天草キリシタン記念館」を訪問した。古城趾上に記念館はあり、丘上に佇（たたず）むと眼下に穏やかな有明海が広がり、幕府軍と一揆軍の大戦場となった原城、その後方に島原普賢岳が望めた。館内には島原・天草一揆で使用された武器や天草四郎陣中旗、キリシタン弾圧期の踏み絵、隠れキリシタンの生活が偲（しの）ばれるマリア観音、その片隅に銃把、火ばさみの形状ともに確かに薩摩形式の「天草筒」が展示されていた。

天草四郎とは江戸時代初期のキリシタンで、島原の乱の一揆軍の最高指導者である。12 万人にも及ぶ農民主体の一揆勢が多勢の幕府軍と対抗しえたのは、天草鉄炮（筒）を所持していたからだと伝える。『天草郡史料』には、つぎのように記される。

絹野淡路之墓石

「先年、志摩守殿の子息と島津薩摩守殿息女との縁返の約束ありし時、種子島より上手の鉄炮鍛冶、桐野淡路と言いけるを志摩守殿に召抱えられ、張り出したる筒なり。その後、志摩守殿より松浦肥前守殿（平戸藩主）へ遣わされ、かの家に奉公し、牢人（浪人）して後、天草に渡り、二江村にて死にけり・・・」と。「鉄炮鍛冶桐野（絹野とも）淡路は種子島で鉄砲製作を２年間修業した後、志摩守に、さらに松浦肥前守に仕え、浪人の身となり、寛永十五年三月十日没した。」と。没年は原城落城の年である。キリシタン館平田館長の案内で、「絹野淡路輔信尚（きぬのあわじのすけのぶなお）の墓」に参詣することができた。苔むした墓石の横に小説明板があり、その要旨は「絹野信尚は種子島で鉄炮づくりを学び、この地で「天草筒」を作った。天草・島原の乱で富岡城が落城しなかったのは天草筒の威力によるものだった」とある。



墓石横の説明板

八板金兵衛清定、石原（牧瀬）慶定、平瀬国清ら三人の合力で完成した火縄銃の情報は瞬く内に戦国大名たちに伝播し、津田監物（根来）、橘屋又三郎（堺）、絹野淡路（天草）らが競って種子島へ修業にやってきたことが理解できる。

（次号：豊後筒のおこり）

令和 4 年 12 月 26 日発行　第 11 号　［発行］西之表市［編集］企画課 歴史文化活用係
〒891-3193　西之表市西之表 7612 番地　電話 0997-22-1111（内 280）FAX 0997-22-0295

西之表市史編さんだより

第 11 号

自然部会

哺乳類たちはいつ種子島にやってきた？

寺田　千里（北海道大学 学術研究員）

種子島では、絶滅したものも含めて、20 種弱の陸生哺乳類の生息記録があります。人間のように船などの道具を使って移動することができない陸生哺乳類は、どのようにして種子島にやってきたのでしょうか？哺乳類たちの来島手段は大きく分けて 2 つです。海水面が下がって九州と陸続きであった大昔に、陸を歩いて種子島までやってきた場合。そして、人為的に持ち込まれた場合です。

この二つの可能性は、遺伝的な解析を行うことで分けることができます。ほかの地域に住んでいる同じ種と、遺伝的に大きく離れている場合、大昔に陸路で渡ってきたと推測されます。例えば、種子島に生息するニホンジカやアカネズミ、ニホンイタチは遺伝的な研究の結果から、氷期の海水面が下がっていた時期（約 10 万年前）に種子島へ渡ってきたと推測されます。一方で、ハツカネズミやクマネズミは船で物資を運ぶ際などに偶然入り込んで種子島にやってきたのではないかと考えられます。

鉄砲館に展示してある
種子島のニホンジカ（マゲシカ）

種子島で現在は地域絶滅したニホンイノシシとニホンザルですが、縄文時代の遺跡から骨が見つかっています。“古くからいた”ということは、海水面が下がっていた時期に渡ってきた動物なのでは？と思ってしまいますが、人間の移動の際に持ち込まれた可能性も捨てきれません。今後、遺跡から見つかる動物の骨から簡単に DNA を解析できる技術が発展すれば、この謎が解ける日がくるかもしれません。

先史部会

個性的な土器：上能野（かみよきの）式土器

新里　貴之（沖縄国際大学 准教授）

種子島を含む北琉球の先史文化には、ときに個性的な土器文化圏を形成する時期がある。大半の時期が九州南部の文化圏に取り込まれていながら、縄文時代、弥生時代、古墳時代など、各時代の終焉（しゅうえん）に向かうとき強い個性を生み出す。

ここではそのなかのひとつ、住吉に所在する上能野貝塚出土土器を標式とする上能野式土器について紹介してみたい。古墳時代後半頃の土器である。

すでに農耕社会に入っていた県本土には、成川（なりかわ）式土器という、刻みのある突帯を胴部に巡らし、脚のつく甕（かめ）（煮炊き）、大壺（貯蔵）、高坏（たかつき）（盛り付け）が基本的な器種の、古墳文化のなかでも珍しい土器文化がある。上能野式は脚をもつ甕という点では成川式に似るが、口を厚くしてふちどり、器面に細い文様（もんよう）を描き、器種は甕のみとなっている特徴がある。近年では上能野式土器にイネの圧痕（あっこん）が確認され、稲作をする農耕社会に入っていた可能性が高まった。それならば当然、イネ貯蔵用の壺は必要なはずだが、現在のところ遺跡からは全く出土していない。

上能野式土器

南には狩猟採集社会の世界が拡がっている。奄美諸島ではスセン當（とう）式土器という貼付け文様が特徴の脚つきの甕と壺、沖縄諸島は大当原（うふどうばる）式土器という文様のない尖った底をもつ甕と壺がセットになった土器群が展開している。

上能野式は、最低限の器種に限定され、独特な口の形状と文様で特徴づけられる、農耕社会の南限で生まれたひとつの独立した土器様式なのである。

中世部会

鉄砲生産技術の伝来

関　周一（宮崎大学 教授）

種子島は、鉄砲が伝来した島です。文之玄昌（南浦文之）の『鉄炮記』には、次のようにあります。

天文 12 年（1543）、倭寇の頭目であった王直を船長とする船が、西村（南種子町）に入港し、その後、島主の種子島時堯がいる赤尾木の港（西之表港）に入りました。船員の中にポルトガル商人が二人いました。彼らは時堯の前で、持参してきた鉄砲を撃ってみせました。時堯は、鉄砲二挺を購入して、家臣の篠川（笹川）小四郎に火薬の調合の仕方を学ばせました。そして刀鍛冶数人に鉄砲の製造を命じました。外形は似せることができましたが、銃底を塞ぐことができませんでした。

翌年、ポルトガル商人を乗せた船が、熊野浦（中種子町）に来航しました。その中に職人が一人いました。時堯は、八板金兵衛尉清定に命じて、その職人から底を塞ぐ技術を学ばせました。一年余りの後、鉄炮数十丁を製造することができました。

鉄砲場（洲之崎）

このように鉄砲が伝わっただけではなく、鉄砲を生産する技術が種子島に伝わったのです。その技術によって、日本国内で鉄砲を製造できるようになりました。

西之表市内には、鉄砲伝来ゆかりの場所が数多くあります。例えば、射的場跡である鉄砲場（写真）や、笹川小四郎屋敷跡や八板金兵衛屋敷跡があります。

校区史部会

西之表市の方言たちをいくつ将来に残せるか？

荒河　翼（市史編さん事務局）

世界で話されている言葉の半分が、今何もしなければ今世紀中に消滅してしまうと言われています。ユネスコは近い将来消えてしまう可能性のある言語を 2010 年に発表しましたが、日本では北海道や八丈島、奄美沖縄で話されている８つの言語が該当しており、これらの言語を記録するため、詳しい調査が行われています。

それでは、西之表市で話されている方言の記録はどれくらいあるでしょうか。西之表市の方言の仕組みが最もよくまとめられているのは『日本方言の記述的研究』で、昭和 29 年に西之表地区を調査したものです。また、鹿児島県立図書館では、昭和 50 年に収録された西之表地区出身者の日常会話の音声テープを聞くことができます。このように、西之表市の中でも西之表地区の方言については、ある程度まとまった資料がありますが、大字地域の方言についてはそのような資料がほとんどありません。西之表市内の方言は地域ごとに違った特徴を持っていますが、このままでは、各地域で話されている方言が跡形もなく消えてしまい、将来言葉の仕組みを知ろうとすることも、懐かしく振り返ることもできなくなってしまいます。

そこで、大字地域の方言を記録するため、現在国上、安城、立山地区にお邪魔し、調査を行っています。「『私は犬が怖い』というのを方言でどのように言いますか？」のように聞取りをしたり、会話を録音させてもらったりしています。今は当たり前のように話されている西之表市の方言たちを少しでも多く記録し、将来に残していければと思います。

方言調査の様子

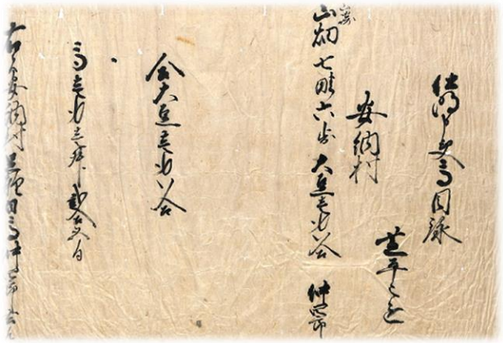
資料のご提供ありがとうございました！

古写真ご家庭にありませんか？まだまだ募集しています！

S36 年 納曽公民館で（楢原英伸さん）

S31 年 天神橋竣工（楢原英伸さん）

S30 年代 牛馬とフェリーわかさ（故種子島時哲さん）


安納芝家文書（上妻文乃さん）

市史編さん事業の経過（10 月以降）

10 月 3～5 日　中世部会史料調査
　4 日　市史編集委員会開催
　10～13 日　自然部会地質調査
　22 日　安納本蓮寺訪問
　26～27 日　先史部会古石塔調査
11 月 2～4 日　校区史部会火縄銃調査
　11 日　校区史部会開催
　18～20 日　中世部会法華寺調査
　24～25 日　先史部会資料調査
　28～30 日　近世部会資料調査
12 月 1～2 日　先史部会資料調査
　9 日　古代部会現地調査
　23～25 日　自然部会菌類調査
　26 日　編さんだより第 11 号発行

島内法華 28 ヶ寺の調査

律宗と法華宗の対立にまつわる史跡矢止石や種子島の法華改宗を成し遂げた日良上人ゆかりの浄光寺などを訪問しました。（いずれも中種子町南界）

市内の石造物調査

江戸時代以前に作られた石造物の調査を続けています。

写真左：上西伊勢神社の仁王像

写真下：古田豊受神社の供養塔